

紙芝居 Volume③ 白山麓 佐羅宮早松社の神輿振り

登場人物

白山権現中宮惣長吏（長）＝学僧の長／ 智積
中宮智積坊奉公人＝僧兵／ 覺弁・金剛丸（架空人物・幼馴染）
加賀国司／ 藤原師高（師経の兄）
国司目代（国司代理）／ 藤原師経（師高の弟）
加賀国府在庁三人の役人
後白河法皇（前天皇）

○参考／平家物語絵巻

*旧暦で表示しています。月は凡そ一カ月進めてください（例えば、2月は3月に）

タイトル フィリップボード 白山麓 佐羅宮早松社の神輿振り



この物語は、平安時代が終わる頃、加賀国に起こったお話です。

天皇を中心とする朝廷の支配体制が崩れ、朝廷と寺社、武士のみつつの勢力によって国は支配されるようになっていました。加賀国でも白山権現の寺社である白山本宮四社、中宮三社が勢力を伸ばそうと中央の寺社である比叡山延暦寺の支配下に入ります。

白山麓にある中宮三社とは中宮、別宮、佐羅宮からなります。能美、江沼郡の平野部にある国府領を次々と三社の領地とすることで国の税を逃れ、勢力を拡大していました。

安元元年（1175）藤原師高が加賀国司に任命され、翌二年、弟の師経が目代として兄に代わり加賀国府へやってきます。目代は寺社の領地を本来の朝廷の領地に戻そうとします。それに反対する中宮三社は加賀国から目代を追いだします。さらに、中宮三社は加賀国司の処罰を求め、安元三年（1177）佐羅宮早松社の神輿を担ぎだし、京都の朝廷の御所へ神輿振りして威嚇し、朝廷へ訴え出ます。古くから日本人に語り継がれる「平家物語」において、白山権現と中宮三社が日本の歴史に華々しく登場する事件となったのです。

F1. 加賀白山宮の勢力と国府



安元元年（1175）秋の頃のことです。加賀国の平野にある村から、年貢を積んだ舟が能美郡を流れる梯川を綱にひかれ軽海郷を進んでいます。

金剛丸「今日の年貢は涌泉寺の倉まで運ぶがや」

覚弁「中宮さまのお供え物やないがんか」

金剛丸「中宮さまから比叡山へ差し上げる年貢や」

あどけなさが残る金剛丸と覚弁の二人の僧兵は、六尺（約 180 cm）の杖を持ち、舟の後に従っていました。

二人は幼馴染、里の村長から「三男坊のお前たちは十二歳にもなった。白山権現を祀る中宮の智積坊さまに御奉公するのじゃ。しっかり御奉公すれば飯もたらふく喰えよう。読み書きも教えてもらえよう」と言い聞かされ、村を送り出されました。

それから三年経って、少しは読み書きも覚え一人前の僧兵になっていました。この頃は、神さまも仏さまも一体としてあがめられ、白山の神さまの姿は貴く恐ろしいが、本当は優しい仏さまが仮の姿になって神となって現れているので白山権現と呼ばれていました。

F2. 加賀国司目代藤原師経、加賀国府着任



安元二年（1176）夏、若葉の頃、京都にいる新しい加賀国司に代わって、その弟が目代として加賀国府へ着任してきました。

国府は能美郡の山際にありました。八町（約 880m）四方の高い土塁に囲まれ、内側にはいくつかの主要な役所が設けられています。田舎の人には、朝廷の権威を知ることができる目を見張る立派な建物でした。

目代藤原師経「われが加賀国司藤原師高の目代、藤原師経である。今日より加賀国は、われが治めるものと心得よ」

目代の師経は、主だった役人・官兵を前に宣言します。

後白河法皇の意向を受けて、朝廷の領地を侵略する豪族・寺社の動きを抑え、厳しく税を取り立て国の財政を立て直すため朝廷より送り込まれたのです。

師経「朝廷におかれては、横行する不正な税逃れは決して許さぬ。さっそくだが、加賀の国府の領地、寺社の領地が描かれている絵図を見せてくれい」

能美郡では白山麓にある中宮三社が平野部に領地を広げ、中宮八院といわれる小寺が建てられています。眺めて見れば、国府の周囲はすっかり寺社の領地に囲まれていたのです。

師経「この涌泉寺という小寺に、温泉と書き記してあるが、国府へ税を納めておるのか」

トントンと絵図を指さし、役人に尋ねます。

F3. 涌泉寺の様子



軽海郷にある涌泉寺は、珍しく温泉が湧きだし湯治ができるようになっていました。農繁期が終わると、病をいやし、日頃の疲れをとるため多くの人が集まってきます。湯治にやって来る人々から、入浴の料金を取るのも涌泉寺の貴重な収入になっていました。湯の番をする僧兵もいます。臨時の小さな市も開かれて、寺の周辺は人々が行き交い大変賑わっていました。

金剛丸「働いたあと、湯で汗を流し湯船にこうして浸かっていると手足の疲れが取れるわい」

覚弁「ふう〜、極楽やのう」

涌泉寺の温泉に下帯姿の金剛丸と覚弁の姿もありました。

二人は、涌泉寺の雑用をするため智積坊から派遣されてきた若者たちでした。

倉庫には、籾の付いた米、あわやひえ、まめなどが山積みされ、大勢の僧兵が、比叡山延暦寺へ納める年貢二千石を舟で積みだす準備をしていました。大切な比叡山への年貢の積みだしのため、中宮三社の多くの小寺から僧兵が集まって働いていたのです。

F4. 役人、税を集めるため涌泉寺に入る



役人「国司さまからの命令である。国府へ租税を納めよ」

とつぜん、武装した官兵を引き連れ、国府の役人が涌泉寺境内に馬で乗り入れてきたのです。

安元二年（1176）七月一日、夏越の祓の神事を終えた翌日、暑い盛りです。馬も人も汗だくだくです。

役人「この土地は国の領地である。涌泉寺には、境内を貸し与えてあるだけじゃ。承知しておくが良い」

国府の役人は、開口一番、高らかに宣言します。

年貢積みだしの作業を終え僧兵は、作業でかいた汗を流し、温泉に浸かっているところでした。役人に追いだされ、わらわらと湯を出て裸の姿をさらします。

役人「悪僧ども、朝廷からの使いに対し、裸で迎えるとは無礼であろう」

湯に浸かっていた僧兵を追い払うと、役人はそのまま温泉に入り、汗と埃にまみれた馬を洗い始めます。

F5. 白山権現中宮僧兵の抵抗



僧兵「何ということなされる。おそれ多くも白山権現の境内、神仏の領地とご承知か。目代殿といえども白山権現を恐れぬか」

裸の僧兵は素手で、役人の乱暴を止めに入ります。

僧兵「代々の目代様は、おそれ多い白山権現の領地であるとされて、神仏に敬意を払い、役人が涌泉寺の境内に入るのをご遠慮なされて来られた」

反論する僧にたいして、役人は手にした鞭を振るい、言葉を荒げます。

役人「ええい、悪僧どもけしからぬ、口答えするのか。この土地は国の領地じゃ。朝廷の御意向に従って国司さまの思いのままにできるのは当然であろう。年貢をわれらに納めよ。新しい目代様は厳しくご命令になっておられる。白山権現を語らい朝廷の御意向に逆らう者は、かんべんはせぬ」有無を言わさぬと役人と官兵は、ドッと涌泉寺境内に雪崩れ込みます。それを止めようとする裸の僧兵も混じって、白山権現の僧兵と国府の官兵は殴り合いを始めます。誰も止められません。双方、次第に太刀を振るっての大乱闘になりました。

F6. 官兵、年貢指し押さえ、涌泉寺を焼き払う



さあ、大変です。殴り合いの大乱闘の最中、白山権現の僧兵は目代が大切にしていた馬の尻尾を切り落としてしまいます。涌泉寺での混乱と棒や太刀まで振り回し、抵抗する僧兵のふるまいの報告を受けた目代は激怒します。そのうえ目代が大切にしていた馬の足の骨を折ってしまいましたから、もうイケマセン、目代は軍勢を出陣させ、涌泉寺を攻撃するよう命じます。

目代師経「許せぬ、兵を集めよ。われが大将となって涌泉寺を攻める。朝廷の御意思に盾突く悪僧どもを懲らしめるのじゃ」

国府の官兵、役人の集めた軍勢は数百を越えました。目代は鎧を身に付け、弓矢を持ち長刀を持った軍勢を率いて涌泉寺目指して押し寄せました。寺には、今まさに比叡山延暦寺に納めるための、沢山のあわやひえ、まめや米が積まれた大きな米倉があります。

師経「米倉に積まれた年貢米は、国府が税として差し押さえよ。抵抗する悪僧は切り捨てて構わぬ」

むろん、覚弁と金剛丸も日頃鍛えた武芸の訓練通り、飛礮を投げ合戦に参加します。

官兵は激しく抵抗する僧兵を蹴散らして、年貢米を奪ってしまいます。

師経「この小寺は悪僧の棲みかじゃ、見せしめに焼き払ってしまえ」
あろうことか涌泉寺の建物に火をつけ焼き払ってしまいました。

F7. 白山僧兵、反撃決意

涌泉寺を守っていた僧兵から、官兵に焼き討ちされ年貢を奪われたと、報せを受けた中宮三社の長、惣長吏智積は激怒します。

惣長吏智積

「白山権現の土地を穢し、神仏をおそれぬ乱暴じゃ。涌泉寺を焼き払うなどもつてのほか、神罰、仏罰が落ちようぞ」



直ちに中宮三社にも報せが走り、急ぎ、別宮において白山権現の神の意思を確かめる会議を行うことになりました。

白山権現にとって大切なことがらは、神と一緒に僧兵の会議が開かれます。そこでは神の意思を聞き、僧兵の行動を決めていました。僧兵は神の子となり、破れ袈裟で顔を覆い誰だかわかりません。神が僧兵の言葉を借りて発言します。神聖で恐ろしい天の決定だったのです。

僧兵大将「国府の役人が白山権現の境内を穢した行いは許し難し。聖なる比叡山へ納める年貢を奪い去るなど言語道断である」

覆面の僧兵大将は語り始めます。神の会議の議題です。

僧兵「許し難し…、言語道断」

と僧兵は口々に叫び、杖や長刀をドンドンと地面に打ちつけます。

僧兵大将「直ちに神の領域を穢し、涌泉寺を焼き払った役人を神仏に代わり懲らしめる」

破れ袈裟で覆面をして神の会議に参加していた大勢の僧兵は、一斉に声を合わせます。

僧兵「モットモ、モットモ」

と見えない神に代わって大声で同意し、これによって神の意思が決まるのです。

F8. 白山権現中宮僧兵反乱

僧兵大将「白山権現の神威を見せてくれる。われに続け、神の御意思じゃ、屈辱を晴らしてくれよう」



白山中宮三社に仕えるそれぞれの坊から集まってきた破れ袈裟で顔を覆った僧兵が、鳥越の三坂峠を越えて駆け下り、能美郡にある国府へ向かって進軍を始めました。

僧兵は、その多くが加賀の平野部にある白山権現の領地の村から集まってきます。長男は家を継ぎますが、次男や三男は白山権現へ奉公に出ています。いざというときには、甲冑姿で長刀を持って合戦に出かけるのも仕事でした。石を投げる飛礮も弓矢と共に強力な武器です。

中宮三社を挙げて出陣する僧兵の軍勢には、白山本宮四社の僧兵も次々と加わり千人を越す人数に膨れ上がっていました。国府は、数百の軍勢で嚴重に守られていました。すでに陽は傾き夕暮れが迫ってきます。合戦は明朝と決め、白山権現の僧兵は国府を囲み夜が明けるまで篝火を赤々と焚き陣を張ります。

F9. 目代、都へ逃亡



平安時代末期、国の政治は乱れ、国司も税を厳しく取り立てて、私腹を肥やすことも珍しくありません。厳しい税の取り立てに耐えかねて、一村丸ごと逃げてゆくこともありました。力を付けた農民は、公家や寺社に土地を寄進し、年貢はその領主へ納め国の税を逃れるようになります。人々は税の軽い領主を求めて国の領地を離れてゆきました。

厳しい税の取り立てに諸国での反乱は珍しくなく、時に国司や目代が殺害されることもありました。

加賀国の目代師経は、国府の軍勢に倍する僧兵の大軍に囲まれるのを見て、

目代師経「反乱じゃ」

と震えあがりました。

師経「このうえは、われは上京し、朝廷へ加賀国が反乱にいたったことを報せる。

あとのことは、そなたら役人三人に任す。今宵、闇に紛れて国府の館を脱する」

夜が更けると目代ばかりか、国府の三役人と警備の官兵もわれさきに逃げてしまいます。国府の館の内部は、篝火だけが赤々とひとり燃え上っているばかりでした。

朝焼けに空が染まるころ、戦支度を終えた僧兵は、国府館の静けさを不審に思いました。僧兵が、恐る恐る館の門を破り中へ入ると、はたして人影などは見えません。もぬけの空でした。

僧兵大将「逃げ足の速いやつ。こうとなれば、我らは本山である比叡山延暦寺へ願い出、加賀国司と目代の罪を朝廷へ訴えようぞ」

F10. 国司・目代の処罰を訴え、佐羅宮早松社の神輿上京



安元三年（1177）早春、雪解けを待って、白山権現中宮で再び神仏の会議が開かれます。そこで中宮三社のひとつ佐羅宮早松社の神輿を上京させることに僧兵一同同意するのです。

僧兵大将「加賀国司藤原師高と目代師経の罪を問う」

比叡山延暦寺へのぼり、訴えをすることに決まります。

僧兵大将「白山権現の神聖な涌泉寺の温泉に馬を入れて汚し、寺を焼き払うの乱暴、

そのうえ比叡山の年貢を強奪したこと許し難し」

若き二人の僧兵、覚弁と金剛丸も神仏の会議に参加しています。

覚弁・金剛丸「モットモ、モットモ」

集まる大勢の僧兵に混じって、二人は破れ袈裟の頭巾を通し、声を合わせます。そして杖を大地に打ちたたき、足を踏み鳴らします。

さらに訴えの願いがかなわないときは、再び故郷に戻らないと神仏との約束事を記した書状を焼き、その灰を水に溶かして会議に参加している皆で呑み干します。この儀式をすることで僧兵は、一人ひとりが直接白山権現に「もし約束を破ることがあったら、どんなにおそろしい罰でも受けます」と誓いを立て、約束したことになるのです。

F 11. 佐羅宮早松社の神輿、御所へ乱入する



安元三年(1177)二月五日、佐羅宮早松社から担ぎだされた神輿は、鶴川涌泉寺を發ちます。

比叡山ではこの事態を穏やかに解決するため、白山権現の神輿がこれ以上進むのをしばらく押しとどめようと僧兵三十人を敦賀湊へ送り込んできました。

しかし中宮三社の僧兵の意志は固く、敦賀湊を秘かに抜け出して峠を越え舟で琵琶湖を渡り、二月末には何とか比叡山につくことができました。むろん、白山権現の僧兵のなかに金剛丸と覚弁の二人の姿がありました。三月末、ようやく朝廷の判断が下され、目代藤原師経が流罪にされます。しかし、国司藤原師高の罪は問われなかったため、

四月十三日、比叡山の神輿と佐羅宮早松社の神輿が京都の町へ乱入します。中宮三社八院の僧兵の担ぐ神輿振りには御所を威嚇し、警備する源平の兵と合戦して国司の流罪を訴えたのでした。

金剛丸「都の人達に白山権現さまの神威を見せるんや。覚弁、見てみい、源氏や平家の軍勢と堂々と合戦するやなんて、比叡山の僧兵はすごく強いんやな」

覚弁「気を付けるんや。源氏と平家の兵が矢を射って来る。飛礫を投げたら神輿の後へ逃げるんや」

御所の門の前には、弓を構えた源氏と平家の軍勢が陣を張って構えています。都の人達も怖いもの見たさで、遠巻きに見ています。

覚弁「都の人があんなに沢山見物しとるやないか。卑怯なまねでせん。白山権現の僧兵として恥ずかしいように合戦するんや。わしらには白山権現がついておられるんや」

若き二人の僧兵は懐にいくつも飛礫を持ち、朝廷からも恐れられた比叡山の僧兵に混じって神輿振りに夢中になって源平の軍勢と戦うのでした。

何人かの僧兵が矢に当たって怪我をし、あろうことか神輿にまで矢を射られたのです。おどろいた僧兵は神輿を御所に捨ておいて、比叡山へもどってしまいました。おそれ多くも神を放りだしたのですから人々は神が罰をくださるのをおそれ、神輿に指一本触れることができず困り果ててしまいます。

この日の神輿振りは京都の人々に大いにおそれられ、朝廷に対する大きな圧力となりました。

F 12. ついに後白河法皇を動かす



朝廷の命令に従わない比叡山の僧兵と気ままに流れる賀茂川は、後白河法皇といえどもただ嘆かれるばかりです。

神輿振りの騒動を起こされ、ついに後白河法皇は白山権現中宮三社の求めに応えることになり、加賀国の国司藤原師高を流罪にします。

後白河法皇「そもそも、あの小寺のあった土地は国の領地である。確かに焼き払ったのは少し過ぎたることであった。しかし、目代のふるまいは間違っていない」

法皇は納得がゆかずにいました。

後白河法皇「この騒動の責任は比叡山である。このままにしておくわけにはゆかぬ」
法皇は決断します。加賀国司流罪の判断をすると、すぐさま比叡山延暦寺の長を解任し、平家の軍勢に比叡山を攻めるよう命令します。

しかし結末はうやむやとなってしまいます。

こうして白山権現の僧兵が担いだ佐羅宮早松社の神輿振りは、加賀白山権現の僧兵の底知れぬ力を全国に示した誇り高い歴史の一コマとなりました。

安元三年（1177）の夏、大火事が京都の町を焼き尽くし、冷夏が都を襲ったそうです。都の人達は、この災害異変は「白山権現の神の罰が下ったのや、祟りや」とおそれおののいたそうです。

（2017年3月31日 にしでやすのぶ）